


平成30年 7月31日	病害虫発生予報 8月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
----------------	------------------------------	------------------------

農薬散布の際は事前に近隣農家や周辺住民に連絡しましょう
～平成30年度茨城県農薬危害防止運動期間中(6/15～9/14)～

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
水稲：紋枯病，斑点米カメムシ類	1
大豆における紫斑病とべと病の防除について	2
サツマイモ：ナカジロシタバ	3
ナシ：ハダニ類	3
ナシ：ナシヒメシンクイ（第四世代幼虫）	4
【防除所レポート】：ナシヒメシンクイの防除適期の予測	4
果樹共通：カメムシ類（チャバネアオカメムシ，クサギカメムシ）	5
【その他の病害虫】	
水稲，大豆，ナシ，ブドウ，秋冬ネギ，夏秋ナス，共通害虫	6
II. 今月の気象予報	7

最新の農薬登録内容は，（独）農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」（http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm）で確認することができます。

<p>詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。</p> <p>茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200</p> <p>予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。</p> <p>ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/ フェロモントラップデータ随時更新中</p>	<p><HP QRコード></p> 
--	---

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. 紋枯病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、発病株率(本年値1.4%、平年値0.9%)、発生地点率(本年値12%、平年値9%)ともに平年並～やや高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 病斑は水際に近い下部の葉鞘から現れ、次第に上位に進展するため、薬剤散布は下部の葉鞘にまでかかるように行う。
- ② 前年発生がみられた圃場では本病が発生しやすいため特に注意し、発生が認められた場合には早期に防除を行う。
- ③ 薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。また、周辺作物(特に早生品種を作付している水田がある場合)に飛散しないよう注意する。

2. 斑点米カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、水田における斑点米カメムシ類のすくい取り虫数(10回振り)は平年より多い(本年値1.1頭、平年値0.4頭)。
- ② 7月下旬現在、水田におけるすくい取り虫数は、クモヘリカメムシ(本年値0.49頭、平年値0.22頭)およびイネカメムシ(本年値0.04頭、平年値0.02頭)で平年よりやや多く、アカスジカスミカメ(本年値0.49頭、平年値0.09頭)で平年より多い。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。クモヘリカメムシでは、高温条件下で産卵数が増加し、幼虫の発生量が増える。

[防除上注意すべき事項]

- ① 成虫を対象とした防除適期は、穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は防除を実施する。
- ② 幼虫を対象とした防除適期は、出穂10～15日後頃(乳熟期)である。乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなることから、斑点米の発生を抑えるためには、この時期の幼虫密度を低下させることが重要である。

(水稲 続き)

- ③ すでに防除を実施した水田であっても、その後幼虫がふ化したり新成虫が再飛来したりするので、発生を認めた場合は追加防除を実施する。
- ④ 周辺より出穂の遅い水田では、周辺の水田で増殖した新成虫の飛来により密度が高まることがあるので注意する。
- ⑤ 薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。また、周辺作物（特に早生品種を作付している水田がある場合）に飛散しないよう注意する。
- ⑥ ミツバチ被害軽減のため、ミツバチの活動が最も盛んな時間帯（午前 8～12 時まで）の農薬の散布はさける。

(平成 30 年 7 月 31 日発表 病害虫発生予察注意報第 2 号参照)

大豆における紫斑病とべと病の防除について

昨年度は病害虫防除所調査圃場の大豆子実において、紫斑病およびべと病の被害粒率、発生地点率がともに平年より高くなりました。平成 27 年に認定品種に採用された「里のほほえみ」は、「タチナガハ」に比べてべと病が発病しやすい傾向にあります。圃場をよく観察して適期に薬剤防除を行い、子実への感染を防ぎましょう。

○紫斑病

[特徴]

開花期や成熟期に雨が多いと発生が多くなる。特に、収穫期前の降雨が発病を助長する。

葉では、中肋や支脈に沿って紫黒色の小斑点ができる。莢では、円形または不正形の紫褐色～紫黒色の斑点ができ、莢が黄化する頃から子実での発病が始まり、子実ではへそ中心に紫色の病斑が生じる。

[防除対策]

- ① 防除適期は開花期の 20～30 日後頃である。
- ② 県内では、チオファネートメチル剤に対する耐性菌が出現しているため、それ以外の薬剤を使用し、2 回目の防除を行う際は FRAC コードの異なる薬剤を散布する。
- ③ 収穫が遅れると発生が多くなるので適期に収穫する。

○べと病

[特徴]

雨の多いときに多発し、主に葉に発生して子実にも感染する。

葉では、はじめ円形または不規則な形の黄白色の病斑ができ、病斑の裏面には綿毛のような灰色の菌そうが盛り上がる。発病が激しいと葉は萎凋して落ちる。子実では、乳白色～黄褐色の菌糸や卵胞子でうすく覆われ、種皮に亀裂を生じることもある。

[防除対策]

- ① 発病初期からの薬剤防除を徹底する。
- ② 種子や被害茎葉は翌年の第一次伝染源となるので、収穫後の被害残渣は土中深く埋める等適切に処分する。
- ③ 収穫調製を丁寧に行い、被害粒を除去する。

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、被害つる先率（本年値 14.8%、過去7年平均値 6.2%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 80%、過去7年平均値 40%）は平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 本種は、第三世代幼虫の被害が最も大きく、例年9月上旬頃から発生するが、本年は平年より気温が高く推移しているため、早めに圃場を観察し発生に注意する。
- ② 老齢幼虫になると防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（つる先、上位葉に丸く穴の開いた葉が散見される時期）の防除に努める。
- ③ 薬剤は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう丁寧に散布する。

ナシ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、寄生葉率（本年値 3.7%、平年値 0.3%）、発生地点率（本年値 40%、平年値 13%）ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は、発生が多くなると防除が困難となるため、発生初期に防除を行う。
- ② 7～8月の乾燥期にハダニ類が多発すると早生種では葉焼けが助長され、早期落葉を招くので、防除を徹底する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 他害虫を対象にIRACコード3A（ピレスロイド系）の薬剤を散布すると、ハダニ類やカイガラムシ類が増加する可能性があるため、散布回数は最小限に抑える。
- ⑤ 薬剤は、収穫前日数に注意の上、かけむらがないよう十分な量で丁寧に散布する。

（平成30年7月31日発表 病害虫発生予察注意報第3号参照）

(ナシ 続き)

2. ナシヒメシンクイ(第四世代幼虫)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、調査圃場のナシ果実において、被害果を認めず平年並である。
- ② 7月下旬までのフェロモントラップ(地区予察圃)への第二世代成虫の総誘殺数は、笠間市、かすみがうら市で平年よりやや多く、石岡市で平年並～やや多く、小美玉市で平年並である。また、土浦市に設置したフェロモントラップでは平年並である。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は、土中深く埋める等速やかに処分し、成虫の発生を防ぐ。
- ② 早生品種(「幸水」等)で被害が認められた場合は、中生～晩生品種(「豊水」や「新高」等)で被害が多くなる傾向があるので注意する。
- ③ 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ④ 薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。
- ⑤ 薬剤散布の時期については、下記の防除所レポートを参考にする。

防除所レポート【ナシヒメシンクイの防除適期の予測】

- ① ナシヒメシンクイ第四世代幼虫を対象とした防除適期は、**第三世代成虫の誘殺数がピークに達した日の1～2日後**である。
- ② 各地点の第三世代成虫の誘殺最盛期は、第二世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測した。
- ③ 表中の土浦市、筑西市(旧下館市)については、今後、病虫害防除所ホームページで情報を随時更新するので参考にする。

※薬剤散布の際には、収穫前日数等に十分注意する。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第四世代幼虫の予測防除適期

地点	予測防除適期 ¹⁾		
笠間市(旧友部町)	8月10日	～	8月14日
笠間市(旧岩間町)	8月14日	～	8月18日
小美玉市	8月13日	～	8月18日
土浦市	8月5日	～	8月9日
筑西市(旧下館市)	8月5日	～	8月9日
筑西市(旧関城町)	8月9日	～	8月13日

1) 予測した第三世代成虫の誘殺ピークの1～2日後とした(7月26日現在)。

果樹共通

1. カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、ナシ園におけるカメムシ類の被害果率（本年値 0.05%，平年値 0.04%），発生地点率（本年値 10%，平年値 5%）ともに平年よりやや高い。
- ② チャバネアオカメムシの7月第4半旬までの予察灯への総誘殺数は、水戸市・笠間市の県予察圃で平年よりやや多く、かすみがうら市の地区予察圃で平年並である。
- ③ クサギカメムシの7月第4半旬までの予察灯への総誘殺数は、笠間市の県予察圃で平年よりやや多く、水戸市の県予察圃およびかすみがうら市の地区予察圃で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 果樹園内でカメムシ類を確認した場合は、活動の鈍い早朝に薬剤散布を行う。
- ② 薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 今後、果実が肥大するカキやリンゴの圃場では、カメムシ類が飛来する恐れがあるので注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
水稻	いもち病 (穂いもち)	発生量:少ない	7月下旬現在, 葉いもちは平年より少ない発生である。
	イネツトムシ	発生量:多い	7月下旬現在, 平年より多い発生である。晩生品種等, 葉色が濃い水田では発生に注意し, 発生が多い場合には, 幼虫が小さいうち(葉先が巻かれ始める時期)に防除を実施する。
大豆	カメムシ類	発生量: やや多い ~多い	7月下旬現在, 予察灯(水戸市, 笠間市)への誘殺数は, 平年よりやや多い~多い発生である。
	ハダニ類	発生時期: やや早い 発生量: やや多い	7月下旬現在, 平年よりやや多い発生である。
	チョウ目幼虫	発生量: 平年並	7月下旬現在, 平年並の発生である。
ナシ	黒星病	発生量: 平年並 ~やや少ない	7月下旬現在, 平年並~やや少ない発生である。
	クワコナカイガラムシ	発生量: 多い	7月下旬現在, 平年より多い発生である。選果の際は, 被害果の混入に注意する。
ブドウ	晩腐病	発生時期: 早い 発生量: 多い	7月下旬現在, 平年より多い発生である。
	べと病	発生量: 平年並	7月下旬現在, 平年並の発生である。
	褐斑病	発生量: やや少ない	7月下旬現在, 平年よりやや少ない発生である。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量: 多い	7月下旬現在, 夏ネギにおいて平年より多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量: やや少ない	7月下旬現在, 夏ネギにおいて平年よりやや少ない発生である。
ナス 夏秋	アザミウマ類	発生量: 平年並	7月下旬現在, 平年並の発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量: 平年並	7月下旬現在, 直近1か月間のフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。
	ハスモンヨトウ	発生量: やや少ない	7月下旬現在, フェロモントラップへの総誘殺数は平年よりやや少ない。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 7月28日から8月27日)

気象庁(7月26日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	30	50
	降水量	関東甲信全域	20	30	50
	日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 7月28日(土曜日)から8月3日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率70%

<2週目の予報> 8月4日(土曜日)から8月10日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並か平年より高い確率40%

<3週目から4週目の予報> 8月11日(土曜日)から8月24日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並か平年より高い確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成30年4月26日発表)の防除所レポート参照

- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。